名古屋大学大学院　国際言語文化研究科

連続シンポジウム
境界の消失と再生

オープニング
―Sasha Colby氏(サイモン・フレーザー大学助教授)を迎えて―

セミナー：Borderline: Exploring the Threshold in H.D.’s Literature and Film

10月29日（金）16時30分　名古屋大学文系総合館6階609号室

パフォーマンス＋講演（通訳あり）

“H.D.: A Life” — Performance and Lecture by Dr. Sasha Colby

11月1日(月)16時30分　名古屋大学文系総合館7階カンファレンスホール

カナダのサイモン・フレーザー大学で教鞭をとるサッシャ・コルビー（Sasha Colby）氏は *Stratified Modernism: The Poetics of Excavation from Gautier to Olson* (Peter Lang, 2009) などの著作・論文のあるモダニズム文学の研究者であるとともに、モダニズムの女性詩人等を題材とするモノローグ（一人芝居）を演じる新進気鋭のパフォーマンス・アーティストでもあります。氏はこれまでに、“Women of the Pound Era”、“‘Eros Drowned’ or ‘Dear Ezra, Best wishes, a bien, Margaret Cravens’”、“Scenes at Nohant” などのモノローグを上演してこられました。今回の来日では、アメリカ出身のモダニスト詩人 H.D.（Hilda Doolittle）を題材とするモノローグ“H.D.: A Life” を上演していただきます。詩人の残したテクスト、詩人について書かれた伝記や研究書を読むにとどまらず、詩人の人生を戯曲化し、それを自ら演じてみるという試みは興味深く、刺激的なものです。コルビー氏は大学において、文学教育に演劇的手法を採り入れる試みをも実践しています。今回のパフォーマンス（約30分）の後の質疑において、出席者の皆さまとこうした点についても意見交換ができればと思います。

またこれに先立ち、H.D. が出演した映画作品 *Borderline* を一つの足がかりにして、彼女の人生と芸術に見出される「越境」のテーマについて参加者と語り合うセミナーを、10月29日に開催します。

シンポジウム
世紀転換期ドイツ、オーストリアの芸術運動

11月3日（水）13時00分　名古屋大学文系総合館7階カンファレンスホール

1. **1902年第14回ウィーン分離派展覧会（ベートーヴェン展）について**

   原沢暁子（名古屋市美術館学芸員）：第14回分離派展とベートーベンフリーズ
   西川智之（名古屋大学教授）：総合芸術観とベートーヴェン崇拝

2. **世紀転換期ドイツ、オーストリアの芸術誌の諸相**

   白川茜（名古屋大学大学院博士後期課程）：
   インゼルが目指した「島」ー『パン』から『インゼル』へー
   古田香織（名古屋大学准教授）：『ユーゲント』における „der Neue Stil“ をめぐって
   高橋麻帆（金沢大学非常勤講師）：『ヴェル・サクルム』とウィーン工房

コメンテーター：西村雅樹（京都大学文学研究科・文学部教授）

19世紀後半、芸術の各分野ではそれまでの規範に異議が唱えられ、世紀転換期にかけて様々な新しい動きが生じました。それは、一方では芸術各ジャンルの枠を超えた「総合芸術」というコンセプトとなって結実する一方で、絵画などの純粋芸術と工芸・建築などの応用芸術の融合、あるいはポスターなど芸術と商業との結びつきという形で表れました。また、日本の浮世絵やアフリカの仮面・彫刻などが与えた影響も見のがすことができません。今回のシンポジウムでは、19世紀末から20世紀初頭のドイツ・オーストリアの美術運動のうち、ウィーン分離派が1902年に行ったベートーヴェン展と、世紀転換期ドイツ・オーストリアで発行された美術雑誌のいくつかを取り上げ、当時の多彩な美術運動の一側面について考えてみたいと思います。

各回とも入場無料・予約不要です
名古屋大学文系総合館の位置につきましては、名古屋大学HPの東山キャンパスマップ（http://www.nagoya-u.ac.jp/global-info/access-map/higashiyama/）をご覧ください
（名古屋大学東山キャンパスマップ66番の建物です）

本連続シンポジウムは、名古屋大学国際言語文化研究科教育研究プロジェクト経費および平成20－23年度科学研究費補助金基盤研究B「境界の消失と再生－19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学」（研究代表者：西川智之）によって行われるものです